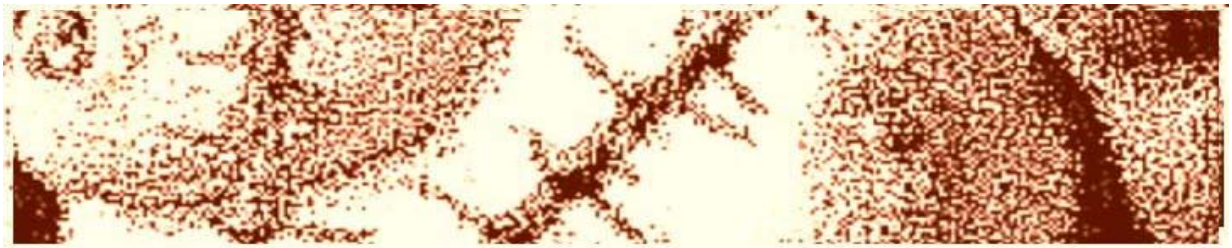
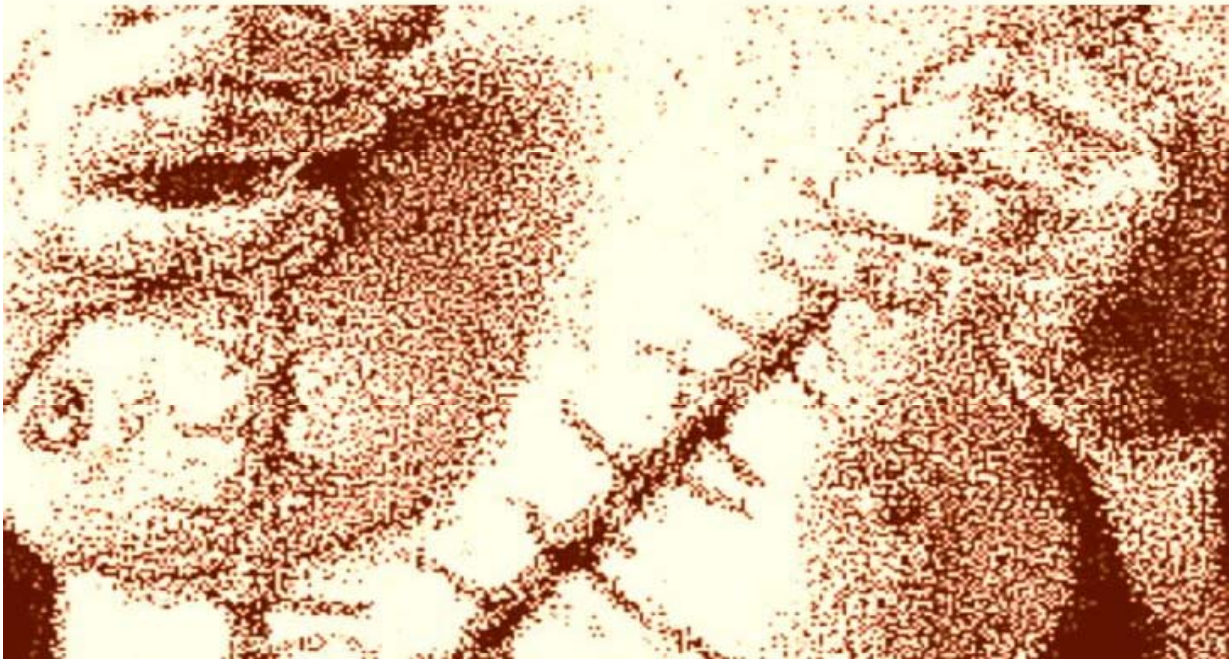


お嬢様はドM

第２部



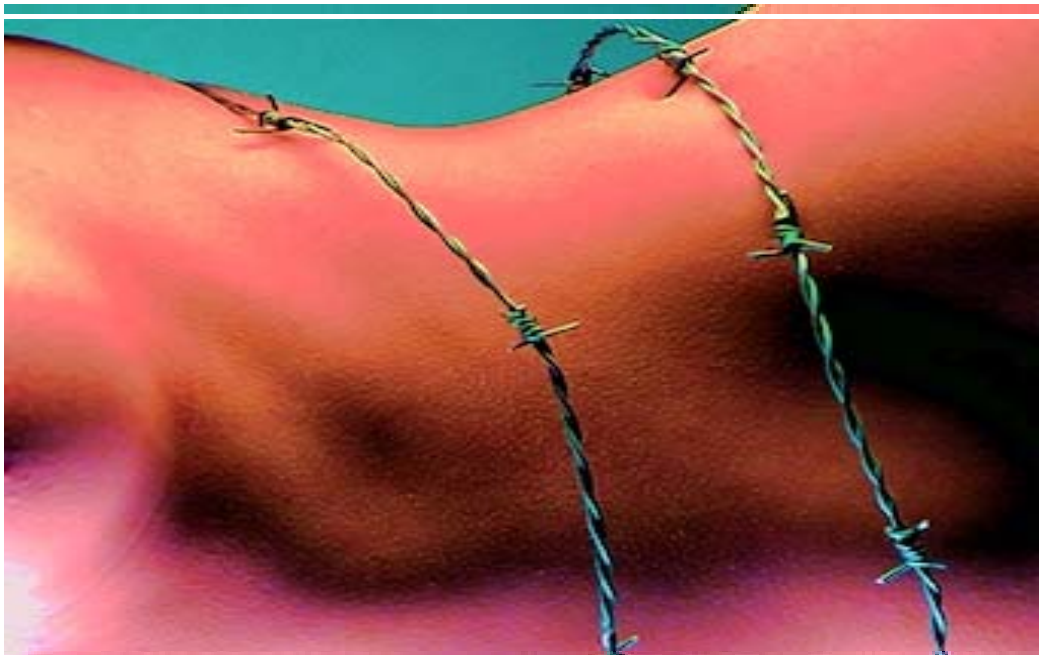
ＳＭ小説

お嬢様はドＭ

第２部

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集の仕事に携わる。ネットでは「ふにゃふにゃ」「あんぷらぐど」名でＳＭ小説を執筆。独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

これまでのあらすじ　８
主な登場人物　１０
灼熱の火曜日　１２
火炎地獄　３４
火かき棒と火箸　５９
悶絶の水曜日　８０
野外浣腸　１０３
鼻輪パーティー　１１５
トイレパーティー　１３９
ニセお嬢様　１６７
ゴキの授業　１７７

極太肛虐　１９６
二穴責め　２３２
フィスト責め　２４６
打擲の木曜日　２８１
移動鞭打ち　３００
ケモノの罠　３２０
逆さ開脚吊り　３３７
ペットの調教風景　３５０
恵梨香の正体　３６４
乳首引き延ばし　３８９
肉裂きの金曜日　４２６

性器ピアス　４５８
レンタル地獄（未発表）　４８５
腐肉の土曜日　５１１
ミミズ責め　５４３
婿決定ゲーム　５７４
浣腸ロシアンルーレット　６１３
ダーツで決めろ　６４２
日曜日の地下室　６６１
奥付　７０２

これまでのあらすじ

わたし、丸木戸恵梨香（まるきどえりか）は、古い資産家一族である丸木戸家の末裔。丸木戸岩之助のひとり娘です。成人式を終えたある日の夜、衝動的に雨の降る庭へ全裸で飛び出し自慰をしていたところを、執事の牧野家のひとり息子である昭彦様に目撃されます。

同じ敷地に家があるのに会ったことのない彼に一目惚れしたのですが、「なんでも言うことを聞くか？」と問われて、どんなことでもすると約束したのです。彼は赤目（あかめ）という男を運転手の藤木の家に送り込み、赤目

そして執事の牧野夫妻らの命令に、「ノー」と言ったらその場で昭彦様との関係は断たれることになりました。

昭彦様にこそご主人様になってほしいと願うわたしは、ドMのゴキブリ、略して「ゴキ」と呼ばれて厳しい命令を受けるのです。亡き母の親族である叔父も昭彦様に荷担し、ヨガ教室とセブン・シスターズによる責めを提供してくれました。

日曜日、月曜日とセブン・シスターズによる日替わり調教を受け、火曜日がやってきました……。

主な登場人物

わたし　丸木戸恵梨香　二十歳

これまでSキャラで育ってきたのに、突然M性に目覚めたお嬢様。ちょっとドジなところがある。

牧野知男、シズエ夫妻　執事

牧野昭彦　牧野のひとり息子　二十歳

藤木武雄　運転手

赤目　昭彦が送り込んだ男

東川栄介　恵梨香の叔父

セブン・シスターズ

七人のプロの女王様たち。マイア、エレクトラ、ア

ルシオーネ、セレーノ、ステロペ、メロー。

灼熱の火曜日

「売春ゴキ、まだ寝てるの？」

シズエさんに叩き起こされました。

深夜まで売春修業をさせられていたからです。誰もホテルには連れていってくれず、三人ともトイレで、わたしのお尻を犯していきました。

赤目に見られながら、トイレの水で弄ばれた体を洗う惨めさ……。わたし自身がトイレそのものになったようなものです。

父は朝も不在でした。

汚物入りの朝食を詰め込んで、藤木の運転でヨガ教室へ。

今日は父がいないこともあって、家を出るときから裸にコートだけでした。

「あんたも哀れだな」

「どうして、そんなことを言うのですか？」

「なんでもない」

藤木との会話はそれだけでした。

今日も元気いっぱいの先生は竹刀を振り回して、わたしをしごきます。

一時間、めいっぱい体を伸ばしました。間違いなく、

柔らかさは増しているようです。
苦しい姿勢も以前よりは長く保てます。ヨガ教室だけではなく、厳しい責めのせいでもあるのでしょう。
金色のソバージュヘアをなびかせて、目が凄く怖いエレクトラ様がやってきました。タバコの臭いがします。
「ゴキ。今日も楽しくやりましょうね」
「ありがとうございます」
「じゃ、行きましょうか」
昨日と同じような運転手付きの外国車に乗ります。
叔父様や昭彦様は、こういうことをすべて把握されて

いるのでしょうか。
どこかで見守ってくれていると信じるしかありませんが……。
車に乗ると、エレクトラ様は長いキセルを出して、その先に細いタバコをつけて火をつけました。
「ゴキ。不幸な星のもとに産まれた気分はどう？」
「ありがとうございます。わたしは幸せです」
「そうなの？　だけど、あんたみたいに、ドスケベでバカでブスで臭い女に生まれたら、誰だってイヤになっちゃうじゃない？」
「はい。でも、わたしはそれが好きなのです」

「そうよね。ド変態らしいわよね。まあ、人はそれぞれ。好きなことをやったほうがいいわ。わたしはあんたみたいな生活はゴメンだけどね。たとえばさ、このキセル」

ふーと紫煙(しえん)をわたしに吹きかけます。

「吸ってみる？」

「ありがとうございます」

吸ったことはありませんが、そう答えるのが礼儀だと思いました。

「ふふふ。ダメよ。あんたの臭い口に触れたら、捨てるしかないわ。これはわたしのお気に入りなんだか

ら」
「すみません」
「だけど、そうねえ、そんなに吸いたいなら、吸わせてあげてもいいな」
「ありがとうございます」
「じゃあね、こうしよう」
エレクトラ様はキセルからタバコを取り外します。
そして片手で、わたしのコートをはだけます。乳房を取り出して、重みを確かめます。
「こんな立派なオッパイを持ってるわけ」
「ありがとうございます」

「だけど、あんたの体は芯まで汚物まみれなのよね。汚物の血が流れているのね」
ぎゅっと下から乳房を掴まれました。
乳房にタバコを近づけてきます。
「ほらほら、この肌がわたしを狂わせちゃうのよねえ」
エレクトラ様はタバコを深く吸いました。先端が真っ赤になります。
その先端を乳輪のすぐ脇あたりに押しつけました。
「ぎいいい」
車内なので、歯を食いしばって大声を出さないよう

に、がまんしましたが、皮膚が焼ける苦痛は、いっきにわたしの体を目覚めさせたのです。
なかなかタバコを離してくれません。エレクトラ様は、笑いながら、なおもタバコを乳房に押しつけてきます。火だねが皮膚を焼き切っていきます。
熱いというよりも、肉を切り裂かれるような痛みです。
「あんたみたいな汚い女、大嫌いなのよね」
「あ、ありがとうございます」
「うれしいのよね？　こういうの」
「はい」

「タバコ、おいしいでしょう？」
「はい。おいしいです」
「まあ、生意気だわ」
タバコを灰皿に捨てると、キセルの先をおへそのあたりに置きました。スッとすべらせるようにして下腹部に。
「このあたりでも、タバコを吸ってみる？」
「ありがとうございます」
この痛みをあそこで受けたら、気絶するでしょう。
焼けた乳輪の脇のあたりの痛みは取れません。まだ切り刻まれ続けているような気がします。

キセルの頭がなおも下がっていきます。コートをすっかりはだけ、膝を開かされます。
「夕べ、何回、セックスしたの？」
「三回です」
「あら、少ないじゃない。おまえみたいなドスケベは毎晩、何十発もやらないと気が済まないんじゃないの？」
「はい」
「じゃあ、欲求不満なのね」
「はい」
「安心しなさい。わたしといれば、しばらくそういう

余計なことは忘れていられるわよ」
「ありがとうございます」
セブン・シスターズには、すべて「はい」と答えなくてはならないのです。だから、なにを言われても、すべてを肯定するしかないのです。
キセルが割れ目に入り込み、肉をかきわけて、粘膜の壷(つぼ)を目指しています。
「男が好きなのに、毎日、わたしたち姉妹が相手でごめんなさいね」
「いえ。お時間をいただき、大変にありがたいと思っております」

「そうよ。こっちは忙しくてね。だけど、引き受けた以上は、クライアントの予想をはるかに超えたサービスをするのがわたしたちの主義なの」

車は郊外の森に向かいます。広大な私有地です。警備員のいるゲートを抜けて、しばらくいくと、小さなロッジ風の建物が現れました。

「たぶん、妹たちも利用すると思うけど、わたしたちの施設なの。こういう便利な場所がいくつかあるの。なぜ今日はここにしたかわかる？」

「いえ」

「ほら、煙突が見えるでしょう？　ここには暖炉(だんろ)があ

るのよ。薪(まき)を燃やす、ホンモノよ。燃えるのってすてきだと思わない？　どんなにキレイなものでも、どんなに汚いものでも、同じように真っ赤に燃えて、あとには灰が残るだけなのよ」

煙や火が大好き、ということでしょうか。

さきほどのタバコは、ほんの挨拶程度なのだとしたら、今日はとってもつらい一日になりそうです。

車を降りると、コートを脱がされました。

エレクトラ様はわたしの体をくまなくながめます。少し晴れ間が出てきて、鈍い光の中です。風は冷たいので、鳥肌が立っています。

「いかにもお嬢様な体形ね。少しはゴキらしくなってきたけど、精悍(せいかん)さが足りないわ。もっと貪欲でギラギラした体にならないとね」
「はい」
「入って」
屋敷に入ります。靴を脱がなくてもいいのですが、裸足になるように言われました。
暖炉に火が入っています。そして、火かき棒のほかに、十本ほどの火箸が、赤々と燃えている薪に突っ込まれているのです。
「おまえのために暖めておいてやったよ」

「ありがとうございます」
「今日は火曜日。火がついているわね。わたしの大好きな曜日だわ」
暖炉の横に白い壁があるのですが、そこに何カ所か鉄の輪が打ち込まれています。
「いいでしょう。おまえの場所よ。ほら、こっちに」
壁に背を向けて手を上にまとめて垂直に伸ばして、手枷（てかせ）とチェーンで輪に留められます。
足にも枷をつけますが、右足を壁の輪に固定すると、体が少し浮いてしまいます。左足も壁に。
体が十五センチぐらい浮いているのです。手枷と足

枷に体重がかかり、とてもつらい状態です。
「ゴキらしい体にするには、刺激が必要よ。それも生半可なものじゃだめね。『鉄は熱いうちに打て』でしょ？　打つ前にドロドロに溶かしてやらないといけないものね」
エレクトラ様は隣の部屋から、ワゴンを持ってきます。そこにはシャンパンやオードブルが並んでいます。
「これは私用」
ふふふ、とエレクトラ様が笑います。
隣の部屋から別のワゴンを持ってきます。ステンレスのトレイの上に、使い捨ての注射針、細長い串、消

毒液、ガーゼや脱脂綿が置かれています。
「ああ」
思わず声が出てしまいます。
「ゴキ。おまえ、早くも感じてるね？　このおまえ用のワゴンが気に入ったみたいでよかったわ」
彼女の指が性器のあたりをまさぐっています。
「若いだけが取り柄ってやつね」
ぴしゃぴしゃと平手で叩いて感触を調べています。しゃがみこんで、両手で恥ずかしい肉丘を割り、もみしだくのです。
「ピンク色しちゃって。もう少し色素が沈着したほう

が、どすけべな感じになるのに」
「ありがとうございます」
「ここなら、いくら叫んでもいいからね。声が枯れるまで叫ぶといいよ」
「ありがとうございます」
どろどろになっている粘膜部分を確認し、その指先を目の前に見せるのです。
「こういうことよ」
鼻につけて自分の淫らな臭いを嗅ぎ、口の中に入れられてしゃぶらされます。
その濡れた指先で今度は乳首をつまみます。ゴリゴ

リとかなり強く潰します。
「こんなもんじゃ感じないでしょう？」
「感じます。ありがとうございます」
「でも、おまえが欲しいのとは違うでしょう？」
「はい。ありがとうございます」
「これがいいでしょう？」
注射針です。包装を破り、銀の針先で、固くなった乳首を、つんつんと突きます。
「こんなんじゃ、おもしろくないわよね？」
「はい、ありがとうございます」
「ほしいんでしょう？」

「は、はい」
返事の途中で、針先が乳首に垂直に立てられます。先がわずかにめり込んでいます。
彼女は乳房を鷲掴(わしづか)みにしました。本気なのです。
「よかったわ、悦んでくれて」
ズブッと針が二センチほども突き刺さりました。
「あぁぁ、うぅぅ」
「右だけじゃかわいそう。左もね」
「はい、ありがとうございます」
さらに勢いよく、ズブズブと乳首に針が突き刺さります。

おそろしい生物に噛みつかれたような痛み。その痛み以上に、自分の肉体が確実に破壊されていることへの悲しみで、涙が止まりません。

「きれいに飾ってあげるわ」

乳輪に、そして乳房に。次々と針が打ち込まれます。自分の体が針の装飾によって変形していきます。

「まあ、きれい。よかったわね」

埋め込まれた針の頭を撫でるように、ぐりぐりするのです。

「ありがとうございます！」

悲鳴のように叫びました。

「ここは大変な悦びようよ」
指が股間に入り込みます。昨日の調教のおかげでしょうか。公園で男に抱かれたおかげでしょうか。すいすいと指を飲み込んで、たっぷりの汁を吹き出しています。
「熱くなってきた？」
「はい」
「だけど、まだドロドロってわけじゃないわ。おまえはもっと淫らなはずだよ。それを見せてもらうわ」
わたしは間違いなく、淫乱になっています。

火炎地獄

ゆうべ、男たちに体を開いて、好きなように突かれていたときだって、こんなに泣いたりはしませんでした。

針は痛い……。

そして、つらい。

なにがつらいといって、金属のその物体が、細いとはいえ、ズブズブと体の中に押し込まれるのです。皮膚を破り、肉を裂いて……。

実際に感じている痛みよりも、そうやってわたしの

体が、エレクトラ様の手で、破壊されていくのがつらいのです。
そして、その結果、恥ずかしげもなく、あそこからたっぷりの汁があふれて、したたり落ちていることがつらいのです。
「ゴキ。ゴキブリ女。おまえにはきっと、特別なツボがあるわね」
まだセブン・シスターズによる本格的な調教ははじまったばかりだというのに、もう、わたしの体は令嬢だとか、生まれながらに約束された社会的地位などと関係なく、きわめて淫乱で恥知らずな反応をしてしま

うのです。
「ほーら、見てごらん」
エレクトラ様は姿見を持って来て、わたしの前に立てました。
そしてやさしく、舌先で涙を拭ってくれました。
「きれいじゃない？」
乳首、乳輪、乳房に無数の針が突き刺さっていて、わたしが泣きながら、小刻みに震えていると、針の末端が、キラキラと光り、揺れるのです。
「針はね、ほかのシスターたちも使うけど、わたしの使い方は特別なのね」

針の末端に、指先でこねた小さな黒いガムのようなものをつけていきます。
「よく、鍼灸ってわかる？　はりとお灸ってあるじゃない？　これはね、お灸とは違うけど、石油から作ったちょっと便利な樹脂なのね」
そして自分ではキセルを手にします。本格的にそれをくゆらせながら、針の末端に黒い頭のようなものをつけていくのです。
煙が流れてくると、むせてしまいます。
「さあ、はじめましょうか。もっと気持ちよくなりたいでしょう？」

首はどうしても左右に動いてしまいます。
「お願いです。エレクトラ様。お慈悲をください」
なんとか思いついた言葉です。
「あら、かわいいことを言うじゃない。お慈悲ね。いいわよ、たっぷりあげましょうね」
キセルの火皿を、針先につけた黒い物体に近づけます。完全にくっつくほどではないのに、黒い樹脂はパッと赤い炎を上げて燃えるのです。
「ひぃぃ」
脅えます。
「大げさね。まだこれからじゃない」

つぎつぎと樹脂に火をつけていきます。可燃性らしく、パッパッと小気味よく燃えていきますが、すぐに赤い火の玉のようになって小さく萎んでいきます。

それでいて、針に沿って少し溶けて流れた樹脂も赤くなっています。

「どこかの国の軍隊が考え出した物質なの。ナパームで、空から降ってきて、爆発はしないで、長く燃え続けるわけ。一時間ぐらい燃えているのよ。すごいでしょ」

「い、一時間……」

「たっぷり時間があるから、楽しいわよね？」

オッパイ全体が、赤い熾火に彩られています。なんと美しいこと。そして、残酷なこと。

針が熱せられて、その熱さがオッパイを芯まで焼くのです。

「ぎぇぇぇぇ」

「だから、おおげさだわよ。そんなには熱くならないと思うけど」

熱いと思ったのは最初だけで、熱いことは熱いのですが、オッパイ全体がカッとなるような、じわじわとした熱さだと気づきました。

「うぅぅぅ。おっぱいが、おっぱいが……」

燃えるようです。

「いい気持ちでしょ？　さあ、ほかにもこうしてしてほしい場所があるわね」

彼女の冷たい指先が、わたしの股間に伸びてきます。柔らかな肉をつまみ、広げ、こすります。

「ここも熱くしてあげましょうね」

広げた内側に、針を突き立てるのです。それは、ホントに痛いので、膝をガクガクさせながら、耐えます。

膣口の周辺に何本も針を突き立てられました。それは、長い針なので、五センチほども飛び出しています。二十本ほども刺したでしょうか。

そこに樹脂をつけていきます。
「これだけじゃ、たりないわよね」
「お許しください。お願いします」
「ええ、そうね。お願いされたからには、してあげないとね」
クリトリス。突起の横から左右に四本ずつ。
「ぎひっ！」
失神しそうです。
おしっこをちびりました。
「だれがそんなことをしていいと言ったかしら？　あやうくわたしの手にかかるところだったじゃない」

「すみません」
そこにも樹脂がつけられて、それに火がつくところを想像しないわけにはいきません。
「まだ足りないわね」
そんな……。
足を広げたまま、宙に浮くように固定されているので、彼女の手が、さらに下へ進んで行くのを、止めることはできません。
針が太ももの付け根、蟻の門渡りと呼ばれるところ。
そして、お尻の穴の周辺にも……。
「ぎひっ」

樹脂は、下向きでも関係なく針にくっつきます。
そして、そのお尻の針から火をつけていくのです。
鏡に映るわたしの姿を、ぼんやりと見ています。
おっぱいの熱は、さきほどから、わたしを陶酔させてしまっているのです。痛みと熱さ。それはとてつもないエネルギーとなって、わたしの体の中を駆け回っています。
パッ、パッと炎が上がり、お尻を焦がし、やがて赤い玉になっていきます。
「すばらしいわ」
すべてに火をつけたエレクトラ様は満足そうです。

電動で動くカーテンを閉じて、薄暗くしました。
部屋は暖炉とわたしの体の赤い炎だけです。
「どう？」
「ありがとうございますぅぅぅ」
「これだけじゃ、ただ気持ちがいいだけよね。ハンダゴテで処女膜を焼いたあなたのことだから、ものたりないと思うの。体が熱くてたまらないでしょう？」
「はい」
「いいわ。もっと、ひどいことをしてあげましょうね」
ひどいこと……。

キセルをしまったエレクトラ様は、次に細い紙巻きのタバコに、スワロフスキーで飾られたライターで火をつけました。
深々と吸ってから、わたしの口にくわえさせます。
「タバコは？」
首を横にふります。
「ちゃんとくわえなさい」
歯でタバコをおさえます。
二本目のタバコ。それもエレクトラ様は自分で火をつけて深々と吸ったあと、わたしの口に。
五本のタバコをくわえさせられました。

「どうせ、寿命が短いおまえのことだから、タバコの害なんて気にすることはないのよ。もっと健康に悪いことをしてるんだものね」
さらに六本目に火をつけます。それは鼻の穴にねじこまれます。七本目も。
これでは、息をするために、タバコを吸わないわけにはいかないのです。
「タバコを落とすんじゃないわよ」
むせそうです。息ができません。
涙があふれて止まりません。
ワゴンの下から、小型の装置を取り出しました。床

に置きます。
掃除機ぐらいの大きさで、折り畳まれた棒を引き延ばしていきます。棒の先端にはゴルフボールほどの球体がついています。
「これって、すごくおもしろいのよ」
リモコンで動くらしく、彼女がスイッチを入れると、球体がバシンと音を立てて青白い閃光を発しました。
「ね、刺激的でしょ」
その装置をわたしの開いた足の下にセットします。そして、棒を伸ばしながら、球体を針で囲まれた膣口にあてます。

「こういう動きもするのよ」
軽いモーター音。同時に棒全体が伸縮し、球体が膣口に押し込まれ、また引き戻されていきます。
「オナニーマシーンってところね。ちょっと危険だけどね」
装置の位置をずらし、下から膣の奥まで突き上げるように、セットされます。
「ほら、感じてごらん、ゴキ女」
エレクトラ様は意地悪です。球体が膣の中をいったり来たり。それは男性の挿入にも似ているのでしょうが、すでにドロドロになっているわたしにとっては、

じらされているような曖昧な気分です。
激しく突いてほしい。そうすればイクでしょう。
呼吸が満足にできないほど苦しく、媚薬のようなタバコの香りに満たされながら、乳房や股間やお尻が、カッカと燃えているわたし。
本来感じるべき苦痛ではなく、それを快楽に変換してしまう……。
「このボタン、わかる？」
エレクトラ様は、リモコンについている赤いボタンを見せるのです。
「これを押すと、さっき見たように、おまえの中の球

体がスパークするよ」
「んんんぐぅぐ」
恐怖で口を開くことができません。歯を食いしばって耐えます。タバコを落とすわけにもいかないのです。
「おまえのお腹が光るかなあ。おもしろいわよね」
球体はぐっと奥深くにまで入り込んでくるのです。
「押してみようかな」
ああ、やめて。それだけは……。死んでしまう。
「どうしようかな」
迷っているふりをして、スイッチを押しました。
バーンと銃で撃たれたような衝撃。筋肉が硬直しま

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一三年一月刊行　第一版　二〇一四年二月　第二版

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。